

使徒マテヤの選び

復活の主イエスは弟子たちに世界宣教の命令を与え、聖霊の力を約束されてこう言われた。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と(1:8)。

弟子たち(初代教会)が、キリストの証人としての使命を果たすためにしなければならぬことは、まず第1に、聖霊の力を受けることであった。彼らは心を合わせ、ひたすら祈って主の約束を待った(1:14)。第2に、彼らはユダの裏切りによってできた使徒団の欠員を補うことによって教会の体制を整えることの必要性を痛感した。使徒は12人でなければならなかった(1:15? 26、ルカ6:13参照)。

ところで「使徒」とは「遣わされた者」の意で、もともと君主によって権威を与えられて派遣された使者のことである。キリストの「使徒」は初代教会の土台を築くためにキリストによって特別に立てられた12人の弟子からなり、キリストの十字架と復活の福音をこの世に宣べ伝えるために、この世に送られた、いわばキリストの全権大使であった。

ユダの欠員を補う使徒たる者はふたつの資格を要求された。第1に、主イエスのメシアとしての公生涯中、いつも主と共に行動し、主イエスの教えとその力あるみ業に親しく接した人であり、第2に、主の復活の目撃者でありその生きた証人でなければならなかった(1:21, 22)。そういう意味では使徒職は第1世紀の使徒たちの後は存在しない。

彼らはバルサバと呼ばれるヨセフとマテヤの二人を立てた。ふたりとも使徒としての資格を有する、甲乙つけがたい立派な人であった。そこで彼らは「すべての人の心をご存知である主よ、この二人のうちどちらをお選びになったかを、お示ください」と熱心に祈り求め、その最後の決定権を主におゆだねした(1:24, 25)。

或る人々は、その際行なわれたくじ引きの合法性を問題にする。しかし、これは決していいかげんな、でたらめなものではなかった。旧約においては特別な場合に、例えば人間の知恵や工夫や判断では決しかねる重大な出来事に直面した時、神のみ旨を求めるためにしばしばくじが引かれた(ヨシュア 14:2、サムエル上 14:41, 42参照)。したがって、これは神意をもとめる非常に厳粛な信仰の行為であった。

ソロモンはこう語っている、「くじは膝の上に投げるが、ふさわしい定めはすべて主から与えられる」(箴言 16:33)。二人の使徒候補者バルサバとマテヤのことで初代教会は熱心に祈って主の御旨を求め、最後の決定を主におゆだねした。主は彼らの祈りに応えられてマテヤを選ばれた。マテヤを選んだのは弟子たちではなく主であったのである。

弟子たちは主イエスが「すべての人の心をご存知である主」(1:24)であることを厳粛な思いで意識していた。私たちもそのようなお方の前に日々生かされていることを覚

えることは非常に大切なことである。うそや偽りのない生活はそのような厳粛な思いから生まれるからである。